東日本大震災後の薬局活動について

　東日本大震災で被災されたみなさまに、こころよりお見舞い申し上げます。私が勤務する薬局は幸いにも職員は全員無事で、建物も津波の被害がなく、部分的な破損程度でした。しかし、薬局のある塩釜・多賀城地域は大きな津波の被害がありました。震災後の薬局活動について報告します。

(震災後の薬局と患者さんの状況)

　つばさ薬局は震災直後から、災害拠点病院である坂総合病院と連携し業務を行ってきました。震災当日は、患者さんが帰ってから若干の片づけをしましたが、停電のため早めに閉店しました。可能な薬剤師は救急の対応をしている坂総合病院でボランティアとしてお手伝いをしました。

　次の日からは、震災で服用している薬を無くしたという方がたくさん来局されました。散乱している薬と薬歴簿を急いで片づけ、調剤しました。「津波で家ごと流された。何もなくなったが、薬をもらえてほっとした。」と患者さんが話してくれました。心からの感謝の言葉

に、薬を調剤して患者さんに提供するという薬剤師の基本的な業務の重要性を痛感しました。

塩釜、多賀城地区は津波の被害を受け営業できなくなった薬局があります。同様に被害を受けながらも処方箋を発行する診療所が複数あり、いままで受け付けたことのない医療機関からの処方箋を持った患者さんがたくさん来局しました。また、地震後交通機関はストップし、ガソリン不足もあり、遠方の病院で治療していた方は受診できない状況になりました。そのため、薬の手帳や薬情で薬つくってほしいという方もたくさん来られました。朝早くから手帳を持った患者さんが開局を待っているような状況でした。通常の 2～3 倍の処方箋の調剤を行いました。地域の患者さんの状況を踏まえ、坂総合病院からの要請もあり、休日も臨時に開局しました。休日も多くの患者さんが来局しました。

職員や他の店舗と連絡が取れない状況が数日ありましたが、幸い職員は全員無事でした。交通機関がストップしていましたが、車の乗り合いなどでほとんどの職員が出勤することができました。職員も被災者であり、家族のこと、家の片づけのこと、食料や水の確保のことなどいろいろな問題を抱えていましたが、患者さんのためにと休みもと

らないで働きました。また、全国からボランティアの薬剤師もかけつけてくれ、殺到する患者さんに何とか対応することができました。

(調剤)

　停電の時は、暗いところで調剤しました。分包機が使えないので、散薬の調剤や一包化はできませんでした。ヒートでの飲み方の説明をしてお渡ししました。薬袋も手書きのため、たいへんでした。幸い、4日目には電気が復旧しましたが、調剤機器がスムーズに動くまで数日かかりました。また、薬袋プリンターは用紙の在庫が少なく、なかなか使用できませんでした。物流が改善するまで、薬以外にもいろいろなものが不足し、調剤にも影響が出ました。

　薬の手帳や薬情での調剤を希望する場合は、在庫がないため同じ成分のものを検索しながら調剤しなければならず、大変な労力と時間を必要としました。

電話が通じないため疑義照会できず、薬の手帳などの情報などで対応せざるを得ませんでした。

(医薬品の調達)

医薬品の調達には苦労しました。津波で薬を流された方、遠方の医療機関にかかっているため、受診できないという方などがたくさんいたため、救急医療に対応する薬品だけではなく、慢性疾患に使う薬など多くの薬品が必要となりました。電話が通じないため、問屋に発注ができず、震災直後は近隣の医療機関に７日分程度の処方でお願いしました。在庫のない医薬品については銘柄変更などで対応しました。問屋さんに発注できるようになってからも、十分な薬品が確保できず、分割調剤などで対応せざるを得ませんでしたが、患者さんの中には十分理解できず混乱が生じた事例もありました。そのような状況で、全国から医薬品の支援があり助かりました。

(在宅訪問)

津波の被害で通行止めになっているところなどもありましたが、薬がきれると思われる在宅患者さんがいたため、震災直後も在宅訪問を継続しました。しかし、薬局の営業車は緊急車両に指定してもらえない地域があり、ガソリン不足のため十分な訪問活動ができませんでした。薬剤師による在宅訪問などの活動を地域に認知してもらうことが必要と改めて感じました。

(OTC と介護用品)

　震災直後は支援物資があまり届いていなかったこともあって、風邪薬、おむつ、ホッカイロ、歯ブラシと歯磨き粉など、瞬く間に売り切れて在庫がなくなってしまいました。赤ちゃんのミルクや津波の被害にあった患者さんの介護パジャマや下着類などを求める方がたくさん来局されましたが、販売するものがなくなってしまいました。

　OTC 関係は問屋が動き出すのに 1 カ月ほどかかりました。避難所などには OTC 薬が届けられていたようですが、地域の薬局の役割を考えると OTC 関係の物流も改善が必要と思われます。

(避難所訪問)

　避難所には坂総合病院に支援に来ている医師や看護師がはいっていました。一部ではありますが、薬剤師も医師や看護師と一緒に避難所を回りました。限られた医薬品で対応するため、薬剤師のアドバイスは重要だったということです。

　また、避難所の環境と衛生の問題は大きく、薬剤師が関わっていければよいと思いますが、残念ながら取り組みができない状況です。

(患者負担とレセプトについて)

　震災直後は混乱していたことや、津波で保健証が流された方も多く、保健者番号の記載のない処方箋を持ってくる患者さんがたくさんいました。停電でコンピューターの入力ができないという薬局側の事情もあって、震災後数日は、患者さんの会計は全て保留にしました。このような場合の保健証の確認は膨大な作業になっています。また、被災者の方は自己負担分が免除または猶予されるということになりましたが、当初全壊・半壊の程度がわからず、混乱しました。

　薬の手帳や薬情で薬を出した分は、後で処方箋発行を医療機関にお願いするということになっていますが、実務は全く追いついていない状況です。医科のように概算請求ができるよう法的な整備が必要と思われます。

(2ヶ月後の状況)

　4月7日の大きな余震で再度停電に見舞われたときは、職員の気持ちの落ち込みは大変大きいものでしたが、その後も、薬局からあふれるほどの多くの患者さんへの対応で頑張っています。ライフラインも

復旧し、薬局の業務は落ち着きを取り戻しつつあります。それでも、家族を亡くされた患者さんや家を流された患者さんに対応するのは、大変つらいものです。まだ、避難所での生活を強いられている方も多く、今後の病状悪化などが心配です。

　地域の方々が健康な生活ができるようになるために、地域の薬局が果たさなければならない役割は大きいと思います。薬局として地域の復興に向けて取り組みを続けていきたいと思います。

2011.5.11　金田早苗(23 回生 1983 卒)